

2019年度 発達障害の可能性のある児童生徒の多様な特性に応じた
合理的配慮研究事業 成果報告書（I）

実施機関名（学校法人国際学園 星槎名古屋中学校）

1. 問題意識・提案背景

星槎名古屋中学校は、名古屋市の不登校対応の私立中学校誘致事業において採択を受け、平成24年4月に開校した中学校である。多くの生徒が不登校を経験しており、不登校歴や学習履歴もさまざまである。不登校の要因は「コミュニケーション」によるものが多いが、書字・読字の困難や感覚過敏によるものなど本人の自覚がなく周囲からも理解されずに自己肯定感が低下しているケースも少なくない。多様なニーズを持った生徒に対し、自己受容をベースにしたインクルーシブな教育環境が求められている。

2. 目的・目標

多様な個性が生かされる教育を実現するために、認知特性を把握し、様々な学びの違いに応じた合理的配慮のデータベースの作成とユニバーサルデザイン教育の実践を深め、インクルーシブな教育環境を実現すると共に、メンタルサポートの充実とICTを積極的に活用した学びを創造していく。また、周囲から理解されにくい「読み書き」や「感覚過敏」などの困難さを持った生徒のアセスメントを検討し、不登校との関係性についても調査するとともに、効果的な学びのスタイルを見つけることで不登校の改善へとつなげていく。また、自己肯定感を高めていくため、様々な体験を通じた、他者との関わり合いの中で成功体験を積み上げ、楽しみながら「生きづらさ」をパワーに変換していくための適切な合理的配慮について研究していくことを目的とした。

3. 主な成果

教職員全員が発達障害の理解を深め、生徒が自からの意思で選択できる環境を作ることによって、すべての生徒にとって同一の条件となり、支援が必要な生徒が支援を受けやすくなり、学校が居心地の良いところとなっている。また、管理職としてインクルーシブ教育に尽力し、退職後も発達障害児者の親の会と活動している教員によるユニバーサルデザイン授業の研修によって、具体的な授業展開が明確になり、すべての授業において「視覚化」「焦点化」された授業へと変化した。

1.2学年の生徒を対象に、評価対象者本人が質問票にある各項目を読んで回答していく青年・成人版感覚プロファイル（Adolescent/Adult Sensory Profile :AASP）を実施した。AASP青年・成人感覚プロファイルとは、60項目からなり、11歳以上に適用可能な尺度である。理論モデルに基づく象限別スコアによってアセスメントを行った。「低登録」、「感覚過敏」「感覚回避」は、平均的より高い、非常に高いに位置する人数が多く、全体の約35%がいずれかに該当した。また、刺激に対する対処の仕方が現れているとも考えられ、感覚過敏さゆえに、感覚回避の傾向にあり、回避しているから「低登録」として反応に対して鈍感になってきているとも考えられる。中には、一見反するよう見える感覚過敏と低登録という、敏感と鈍麻の両方を持つ生徒が約13%存在していることが分かった。

WISC-IVによるディスレクシアに着目し、生徒の認知特性について検討した。20XX+Z年の入学生徒の約34%の生徒が言語理解指標（VCI）と処理速度指標（PSI）の有意差に1S（標準偏差）以上あり、非常に割合が高い。また言語理解指標（VCI）とワーキングメモリー指標（WMI）の差が1S（標

準偏差)以上の生徒の「読み」「書き」「内容理解」、について URAWSS-II (Understanding Reading and Writing Skills of Schoolchildren II) の結果から、読むことに困難はないが、書字に関して 30%が困難を示していた。生徒の見えにくい困難さは不登校との関連性があると考えられる。

4. 拠点校における取組概要

① 発達障害の可能性のある児童生徒のつまずきや困難な状況の認識・理解及び、適切な実態把握による合理的配慮の提供に関する研究

(ア) 感覚面(視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚など)において過敏性や鈍感性がみられる児童生徒に対する合理的配慮に関する研究

○不登校の中には感覚過敏(過剰適応含む)ハイリーセンシティブパーソン(以下HSP)も多く、教室内の集団に入るのに抵抗感が強い。また、過去の負の体験を思い出すことによってパニックを起こしてしまうことがある。それぞれの特性に応じた指導と集団内での過ごし方の工夫について、機器の活用やステップアップルーム等の活用したクールダウンやメンタルサポート及び心理教育の実施。

(イ) 通常の学級担当教員が児童生徒の実態把握に基づき、個別の指導計画及び個別の教育支援計画を効果的に活用し、合理的配慮の実践を行う研究

○一定数見られるディスレクシアのスクリーニングを行い、生徒の困り感を把握し、認知特性に応じた指導計画を作成し、支援を明確化する。また、基礎的環境整備を整え、音声教材及び ICT 機器の有効な活用方法について。

(エ) 中学校の定期試験における ICT 等支援機器を使用した合理的配慮の研究

○中学校における定期試験において、書字や読字に困難を抱えている生徒に対し、試験問題をデータ化し音声読み上げ機能や様々な表出方法(タイピング・手書き変換アプリ・音声入力等)について PC またはタブレット等を活用した合理的配慮の効果について

5. 今後の課題と対応

他者との違いを肯定的に受け止め、誰もが自分に必要な支援を受けることができる権利を持っていることを啓発し、インクルーシブな教育環境を確立していく。また、認知特性に応じた教育を提供し、生徒が持っている学ぶ意欲を高め、力を引き出すことができる授業を確立していく。また、COVID-19 対策によって双方向の配信授業が標準化され、様々な授業参加の仕方を認めていくことが可能になったことを実感している。終息までは時間がかかり、大半が公共交通機関を使っている登校のため、安全を確保し、生徒が安心して登校できる日を迎えることを予測できない。登校する生徒と自宅受講の生徒とが混在する中で学校教育を考えていかなければならない状況にある。当面は、配信と対面のハイブリットな学校生活において「友人関係作り」「学習」「学校行事」「部活動」を発達障害の生徒にも負担なく参加できるような合理的配慮が課題となる。そして、COVID-19 を乗り越えたときには学校が大きく進化できるよう尽力していく。

6. 拠点校について

(中学校)

| 指定校名： | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|------|-----------|----------------------|----|----------|----------|-----|----------|---------------------------|--|-----|----|
| | 第1学年 | | | | 第2学年 | | | | 第3学年 | | | |
| | 生徒数 | | 学級数 | | 生徒数 | | 学級数 | | 生徒数 | | 学級数 | |
| 通常の学級 | 71 | | 3 | | 90 | | 3 | | 88 | | 3 | |
| 特別支援学級 | | | | | | | | | | | | |
| 通級による指導 (対象者数) | | | | | | | | | | | | |
| | 校長 | 副校長 教頭 | 主幹 教諭 指導 教諭 | 教諭 | 養護 教諭 | 栄養 教諭 | 講師 | 事務 職員 | 特別 支援 教育 支援 員 | ス ク ー ル カ ウ ン セ ー ラ | その他 | 計 |
| 教職員数 | 1 | 2 | | 13 | 2 | | 9 | 2 | | 1 | | 30 |

※特別支援教育コーディネーターの配置人数：1

※特別支援学級の対象としている障害種：

※通級による指導の対象としている障害種：

7. 問い合わせ先

組織名：学校法人 国際学園

担当部署：星槎名古屋中学校